

県作文の会七十二年の歩み

現状、そして未来へ

青柳勇治

はじめに

戦後八十年の中で、県作文の会（略称…県作）の歩み・果たしてきた役割を探るのは非常に興味深く、同時に古い資料を読み込み、取捨選択するのは困難な作業であった。県作の草創期の資料に目を通すと、先輩たちの思いや願いが生き生きと感じられた。

私は、今春退職し三十九年間の教員生活に終止符を打った。新潟大学在学中に生活綴方研究会「ふでばこ」に所属していたことを入れると四十年以上、作文教育と関わってきたことになる。原稿をまとめながら、先人の遺産をどう引き継ぎ、発展させるべきか、考える機会となった。

一 今までの歩み

県作は、県内各サークルの実践交流の場であったため、事務局が、各地域サークルの連絡・調整、集会の企画・運営を行っていた。したがって、一つの研究団体というよりは各サークルの協議会的存在であった。九〇年代には、各地域サークルがなくなり、県作という全県一つの団体として活動するようになった。

①県作の歴代会長・事務局（長）

一九五二年 事務局長：古川士夫（県作創立）

一九五三年 事務局長：小林吉樹

一九六一年 事務局長：大塚達男（県作再建）

一九六四年 事務局長：涌井好一

一九七二年 会長：涌井好一 事務局：佐藤守正
一九八九年 会長：佐藤守正 事務局：中魚沼サール

一九九四年 会長：佐藤守正 事務局：加納マズミ
一九九八年 会長：青柳勇治 事務局：松本直紀

②戦後の歩み

戦前、県内も生活綴方実践が盛んに行われていたが、戦中の治安維持法による弾圧により実践は困難となった。

以下は、佐藤守正編（一九八七年）『新潟県作文の会活動史年表』資料、木村隆利編（一九九一年）『戦後新潟県の民間教育運動年表』資料を中心にとまとめた。

●一九五二（昭和二七）年八月二日

第一回全国作文教育全国協議会が岐阜県中津川で開催。

本県から参加した十四名が、各県で「作文の会」が続々と誕生しているのを聞き、本県でも作文の会を結成しようと、次のことを確認する。

・毎月下旬、機関誌を発行する。

・原稿は原稿用紙一枚くらい。原稿締切日は二十日。

・各都市連絡員十二氏を委嘱する。

・秋、総会を開催し、会費、活動方針を決定する。

○同年十一月十六日

県作文の会発足総会（柏崎）。

国分一太郎氏の講演「なぜ綴り方のしごくに期待をかけるか」一般聴衆百七十名参加。夜は、旅館で、県下各地から集まった約六十名の綴り方教師たちが、子どもの作品を抱えて実践の交流をした。当日、県作会誌三号、百五十部配布。

県作の活動家に対して警察の妨害が目立つてくる（アカ攻撃）。

●一九五三（昭和二八）年

第二回県作大会（長岡）。「講師は寒川道夫。雪の降る寒さにもかかわらず四十数名の参加。ガリ切り・印刷の仕方・文集の作り方など、手取り足取りで教えていただいたことが印象に残っている。勿論、『山芋』の中の指導記録「いのちの歌」にかかわる話や弾圧された頃の話も忘れることができない。」（「」部分は本間繁輝氏の感想）

●一九五四（昭和二九）年

県下サークル数二十三。会員百七十六名。岩船村上、

東蒲、三南、西蒲・燕、三島など。この頃、県作事務局は、地域サークルの持ち回りであった。

●一九五五（昭和三〇）年

県作が母体となり「県教師の会」設立。百五十名余り参加。

五〇年代後半から同じ民間教育研究関係の「教育の現代化・科学化」の流れの中で生活綴方に対するはげしい批判が加えられた。また、実践家の多くが各教科サークルの中心的なメンバーとして転出するなかで、県作の組織的な活動が困難になった。

●一九六一（昭和三六）年 二月四日

県作再発足。作文教育講座実施。大塚達男、大場や工、池亀一夫が須田の援助を受けながら、県作を再建。

●一九六二（昭和三七）年

『ぼくらの村』（第一回大関松三郎賞入選作品集）を発行。

県教職員組合が文詩集「にいがたの子ら」（年一回・毎年）創刊。県作は『ぼくらの村』を廃刊とし『にいがたの子ら』の編集に協力することとした。

●一九六五（昭和四〇）年

県作会報「小黒板」No.七号発刊。現在も、この会報

名を使用している。県内の日本作文の会会員数五十八名（全国三位の会員数）。

○十一月

『児童詩通信』創刊。（佐藤事務局）

発行の意図、「……だれかに教えてもらうのを待つのではなく、みんなが自分の意見を率直に出し合いながら、自分自身の児童詩をみる目をきたえ、児童詩の果たす教育的役割をつかもう。……」（佐藤）会員は約百名、県外から何人か加わった。

●一九六六（昭和四一）年

『子ども風土記』作りの仕事始まる。

●一九七二（昭和四七）年

『子ども風土記・新潟』出版記念会。長岡商工会議所ホール 六十名参加。

○八月四～六日

第二十一回作文教育研究大会（新潟大会）白山小。県内外から千七百余名参加（内県内参加者四百八十三名）。

●一九八一（昭和五六）年 三月

『日本の子どもの詩・新潟』刊行。（岩崎出版）

●一九八二（昭和五七）年 三月

『にいがたの子ら・〇学年』全七巻刊行。(野島出版)

●一九八七(昭和六二)年二月

県作文の会創立三十五周年記念集会。

●一九九八年以降から現在へ。

青柳、松本体制になつてからの県作の歩みは、会員の減少、職場の多忙化、県内に散在する会員が一箇所に集まることの困難さなど、サークル運営は困難を極めた。ほんの数名での例会も少なくなかった。

それでも、子どもの作品を持ち寄り、文章の奥に隠された子どもの内面・生活などを読み取り、お互いの読み取りを学び合うことは、興味深く学ぶことが多かった。子どもの作品の存在こそが県作の強みであつた。困難な中にあつても作文教育の意義や魅力を広めていこうと継続してきた。

以下、年に一回行つてきた。外部講師を招いての研究会の講師を紹介する。

時崎幹男氏(九九年)

佐藤美知子氏(〇一年)

松下義一氏(〇二、〇八年)

近藤孝氏(二〇年)

横田裕二氏(二一年)

伊藤久美子(二二年)

小宮山繁氏(二三年)

森朋子氏(二四年)

村山士郎氏(二五年)

田中雄二氏(二六年)

森朋子氏(二七年)

白木次男氏(二八年)

和田禎二氏(二九年)

白木次男氏(三〇年)

西沢桃子氏(三一年)

伊藤和美氏(三二年)

土佐いく子氏(三三年)

松下義一氏(三四年)

日本作文の会常任委員を中心に、研究者としては、大東文化大学の村山士郎氏、新潟大学の田中雄二氏などバラエティに富んでいた。

この研究会の成功を目指して、会員の結集や職場の仲間の勧誘などを行い、新たな会員を獲得することができた。県作にとって貴重な会である。

二 現在の活動

ここ数年、次のような方針を掲げて活動している。

○作文教育・児童詩教育の歴史的遺産や実践について学び合い、現代の新潟県の子どものたちの課題や可能性を探りながら、子どもたちを見る目を育てたり、学級作りに生かしたりできる研究会にする。

○ベテランの教師が新たな刺激を得ることができ、若手の教師が「作文教育に取り組んでみたい」と思える研究会にする。

コロナ禍以来、例会を対面で行うことが少なくなりました。当初は、集まることも困難であった。サークルに集まったことが感染の原因にならないように配慮した。

ところで、コロナ禍で様々な会がオンラインで行われるようになると、県作も情報通信機器に堪能な会員の力を借りてオンライン例会を実施するようになった。昨年度は、以下のように実施した。

①実践カフェ（オンライン）…悩み、実践などを口頭で交流。

②例会（オンライン）…レポートを持ち寄り実践交流。

③例会（ハイブリット）…江南文化会館で対面とオンラインで実施。内容は②の例会と同様。

④研究会（ハイブリット）…アオーレ長岡。実践カフェ、実践レポート発表、松下義一氏の講演、十一名参加。

例会は、六名前後で少人数ではあるが、毎回、楽しく実践交流ができて多くの学びがある。

会員の構成が多様であるところも県作の強みである。小学校通常学級担任、特別支援学級担任、放課後デイサービス職員、民生委員、県民教育研究所員などの会員が集まっている。そのため事例や作文を、個と学級集団・発達・家庭や地域などの様々な視点で分析す

ることが可能になっている。

三 実践

数年前に特別支援学級（知的障害・四年生）で、主に個の内面・生活ぶりの理解をねらって行った実践を紹介する。

ケイタ（仮名）は、自己表現が苦手で、話す時に極度に緊張していた。話しかけても反応が少なく、本人の内面を知るのが難しかった。支援学級には、国語と算数の時間を中心に来ていた。そこで、少人数で話す練習をしようと、授業の前半にスピーチタイムを設けてみた。

しかし、自由なテーマでも指定されたテーマでも、不安そうな顔でぼつりぼつりとつぶやいただけだった。何か、ケイタの内面を知る手がかりはないかと考え、書かせてみることにした。授業の始めに、日記タイムを十五分程度設定して書いてもらった。

さいあくだった

ケイタ

きのう、ねるとき、パパがうるさくて ねれなかつ

た。いびきをかいててうるさかった。

きょう、さいあくだったこと

ケイタ

きょう、おれがねていたとき、ママにふとんをとられて起きた。ママがくるくるとふとんをとった。ちょうど、朝おきる時間だった。

ケイタの日記は、大人しそうに見える外見からは、想像のつかないものだった。「へー。パパのいびきはうるさいんだね。」と聞くと、普段より強い調子で「うん。」と返事が返ってきた。「さいあく」という言葉がよく出てくるが、嫌なことが多いのか、語彙が少ないのか、ケイタの内面や表現方法を考える機会となった。

国語の詩の単元で、『作文と教育』の作品などを読み、気に入った表現を見つれたり、感想を話し合ったりした後に書いてもらった。

ケイタ

前の日、ベットのところでママをたおそうとしたら足をくじいて死んだ（いきている）

詩といえるのか、つぶやきのような表現だったので、

どういうことかと質問した。

T「ベットのところで、ママを倒そうとしたっていうのは何をしてたの。」

ケ「プレス。」（ケルケイタ）

T「へー。ママとプレスをするんだ。いつもやってるの。」

ケ「うん。」

T「どうやって倒そうとしたの。」

ケ「パンチした。」

T「やさしくパンチしたの。」

ケ「思いっきり。」

ふつふつと笑いながらグーをつくって見せてくれた。小柄なケイタがパンチしても痛くないかなと思いつつも、ずいぶん乱暴だと思った。

T「おいおい。お母さんはいたかつたんじゃないかな。」

ケ「うーん。痛がつていた。」

T「パンチしたら（ケイタが）足をくじいたの？」

ケ「うん。」

T「くじいてどうなったの？」

T「お母さん、心配したでしょう。」

ケ「うーん、心配しないで笑ってた。」

T「へー。そうなんだ。」

と聞きながら、親子の関わりがおもしろくて笑ってしまつた。その後、ケイタに質問しながら一緒に詩を書いた。

くやしかった

ケイタ

あるばん、ママとプロレスをした。

ベツトの上で

ママにパンチをしたら

足をくじいて

ぼくがたおれた

ママはぼくを見て

心配もせず大声で

「わはははは」

と笑っていた

くやしかった

(どんな気持ちだったかな?)

(ママはどうした?) 青柳の質問

(どんなふうに笑ったの?)

詩の授業では、友達作品やその子の実態に合った参考作品をたくさん読むようにした。作品を読みながら作者のものの見方や考え方、表現の仕方を学び合う

ことが、表現意欲を引き出し、表現力の向上につながると考えた。子どもによっては、本人の書きたかったことを聞き出し、ゆがめないように書き足したり、聞き書きしたりすることもあった。

四 今後の取組

①学習・実践交流の充実

例会・実践カフェをオンラインとハイブリットで行い充実させていく。オンラインの利点で平日の夜の開催も可能になった。参加しやすさもあり、職場の仲間を誘いやすくなっている。新しい会員を迎えることができるようになってきた。

事務局会議もオンラインで行っている。サークルLINEもある。新しい時代のサークル運営を発展させていきたい。

②日本作文の会全国大会(関東大会)への積極的参加

県作からもスタッフや世話人で参加する。県外の実践に学ぶ貴重な機会である。誘い合って参加したい。

③講師を招いての研究会の継続・充実

講師の選定、日時を早め決めて参加者を募る。県外のサークルからオンライン研修会の誘いもある。興

味のある研究会に参加できる機会が増えた。相互に研究会の案内をして実践交流を深めたい。

終わりに

戦後の県作には多くの実践家が集い、発展させてきたことを再認識した。何度かの再建集会が行われ、今の県作がある。諸先輩方に感謝したい。とりわけ、前会長の佐藤守正氏からは、新採用以来、公私ともに大変お世話になった。借用した資料も非常に参考になった。

資料に当たりながら、民間教育研究団体や実践家の書籍・資料の散逸が心配になった。何とか保存し、次の世代に伝える方法はないだろうか。

私自身も退職して、書籍や資料の整理に追われている。廃棄するにはもったいない。今しばらく元氣なうちには書籍と資料に埋もれたい。

(あおやぎ ゆうじ 県作文の会)

資料編

53年1・2月
古志郡特集号



72年
全国大会速報集



1981年刊行



63年 第2集

『日本の子どもの詩 新編』より
子もり

森山みわ子 小4
(おんぶしたら)

つる子を ぶったら
ひろ子が ないた
ひろ子を ぶったら
つる子が ないた
ふたり ぶったら
つぶれてしまった

岩船郡大川谷小(指導)
本間繁輝

はがとれた

にしの つよし 小1

きのう

はがとれた。

ひっぱったら

はがとれた。

そして きょう

小さいはがでていた。

おかあさんにおしえた。

にいちちゃんにもおしえた。

わらって

「よかったな。」

といった。

へらで

はばっかり

なめていた。

十日町市西小